

松波むかし語り ここに住み続けて その31

今回のお客様

ゆりの木通りで人のつながりづくりを目指す

かいほ まこと
海保 真 さん 70歳 2丁目

“いろいろな人とつきあっていると、
日々楽しいです！”



「これまできちんと美容室に来ていた女性が、ある時からパタッと来なくなった。これは、何かその人に異変が起きていると思うんです。おしゃれは人間の尊厳みたいなものですから」—美容師の海保さんは、「高齢者やハンディキャップのある方ももっと美しくあってほしい」と願っていて、そのため今、精神障害者の人たちに美しくなる方法を教える活動に取り組んだりしています。

海保さんは昭和16年、東京府麻布区（現在の東京都港区）で生まれ、終戦直前、20年7月のいわゆる「七夕空襲」で焼け出され、すべてをなくして当時の佐倉の連隊兵舎へ移りました。「今でいう被災者住宅」だと言いますが、地元の佐倉中学を卒業して松波に越してきました。

松波では住み込みの新聞配達をし、20歳になって美容学校へ通って資格を手にします。今の「美容室 MADOKA」は最初、ご自身の名前をとって「まこと美容室」と言ったそうですが、現在のゆりの木通り沿いにお店を開いたのが昭和39年12月、今から48年前の事でした。

そこから海保さんの活動が始まります。「小さな店はなかなか続きません。そこで、仲間がつながってみんなで支えて行こうと考えたんです」。そうやって「ゆりの木商店会」の立ち上げに参加し、地域通貨では全国的に有名になった「NPO ピーナッツクラブ西千葉」を結成します。

松波を「明るく年取らない街」だという海保さん、「確かに高齢化も進んでいますが、千葉大生など毎年のように入れ替わる学生が家賃を払い、アルバイトをし、お金も落とします。ふくろう広場で毎月、第三土曜日に開いている土曜市も千葉大生が主体で運営されているんです」。「そうした場所だからこそ、もう一步努力すれば、お金をかけなくとも人のつながりを広げてゆける」、そう考えたのがピーナッツクラブを起こした始まりでした。今では60の事業所と2500人の会員をつなげる組織へと発展しています。今年は松波公民館を借りて「ピーナッツクラブ12周年」のダンスパーティーも開きました。



町会についてひとこと。「地域に密着して、一番人とのつながりをもっているのは町会です。回覧板を回すのは企業じゃやれません。それだけに、人のつながりをつくるには最高の組織です」。「松波」というより「西千葉地区の住人」という意識が強いという海保さん、70歳の今も、人のつながりを広げる新しい活動を模索中です。

MADOKA 美容室エントランスは手造りです